方向
第一六七号　一九九五年二月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

# 李賀歌詩編

（訳注稿　二）　1995 01 25　原田憲雄

（一〇〇二）

## なごりの糸遊

残絲曲

〔残糸曲〕・残絲　呉正子が「この篇は晩春の景をいう。残糸は、あるいは柳とし、あるいは遊糸とす」という。柳と遊糸はまったく別のものだから、ややこしいが、この詩ではどちらともとれそうなところがある。遊糸は、日本語でいう糸遊であり、糸遊は、「かげろふの日記」のカゲロウなのだが、そのカゲロウを「蜻蛉」だとか「陽炎」だと日本の辞書が説明しているので、よくわからなかったが、斎藤晌がいうように「くもや小虫などが始めてかえったときついていた細い糸が無数に空中に飛びただようもの」で、錦三郎がいう「通称『雪迎え』」（蜘蛛百態）であり、河口久雄が「それはヨーロッパで聖処女の機のおさから落ちた『ノートルダムの糸』fils Notre-Dame だと信ぜられたもの、シェイクスピアがジュリエット姫のあしどりの軽さ、恋のあだな喜びを形容したところでゴサマァgossamerとよんだもの」（かげろふ日記）と解説するものである。梁の武帝の「晻曖遊糸を矚る」（天安寺蔬歳圃堂）が、遊糸を詩に用いる例として古く、賀がここから学んだことは疑いない。簡文帝も「風糸百条乱る」（三月三日）とうたい、沈約が簡文帝に唱和し、北周庾信の「残糸は折蓮を繞る」（遊昆明池）に続く。

南北朝時代は糸遊を詩文に取り上げるのが大流行、以後、唐代の詩に及ぶ。李賀の残糸もほとんど糸遊にちがいない。「残糸曲」は、文体としては楽府とみてよいものだが楽府詩集には見えない。拙稿「残糸曲」（李賀研究一四）参照。

（一〇〇二）

しだれやなぎの葉は老い　鶯は雛をそだて　○一 垂楊葉老鶯哺児
なごりの糸遊もたえだえ…　そこへ黄蜂がやってくる　○二 残絲欲斷黄蜂歸
みどりの髪の少年　金のカンザシの女性　○三 緑鬢少年金釵客
あさぎ色の玻璃の壺　中にしっとりしずむ琥珀　○四 縹粉壺中沉琥珀
花の台は暮れかけ　春はいとまを告げて去り　○五 花臺欲暮春辭去
落ちた花が起ちあがり　つむじ風は舞う　○六 落花起作廻風舞
楡のさや　散りいそぎ　数もしれぬ　○七 楡莢相催不知數
沈さんの青銅の銭そっくりで　都大路を狭しとばかり　○八 沈郎青銭夾城路

○一〔垂楊　葉老い　鶯は児を哺み〕　・垂楊　しだれやなぎ。楊も柳もヤナギ科だが、楊はポプラのように枝が上を向き葉が円いもの、柳はシダレヤナギのように枝が垂れて葉の細長いものを指す。しかし、垂楊といえばシダレヤナギである。枚乗がいう「忘憂の館の垂条の木、枝は逶遅として紫を含み、葉は蓑蓑として緑を吐く。出入する風雲、去来する羽族、既に上下して好音、亦た黄衣にして絳足。蜩螗は

響きを厲しくし、蜘蛛は糸を吐く。階草漠漠、白日遅遅。ああ細柳、軽糸を流乱す。……ああ楽しいかな。ここにおいて樽に縹玉の酒を盈て、爵もて金漿の醪を献じ、庶羞千族、六庖に盈満し、弱糸清管、風霜と共に雕す」（柳賦）ここには枝垂れ柳があり、糸遊があり、縹玉の酒、金漿の醪がある。柳賦を紹介した西京雑記はこの文の前に「梁の孝王、忘憂の館に遊び、諸遊士を集め、各々賦を作らしむ」と説明する。賀は「梁臺古愁」（四一八六）で孝王の園遊をうたう。柳賦を知らなかったはずはない。それなら「残糸曲」の舞台も、愁いを忘れるに足るたのしい館だった。しかし梁園の広大を誇った賀のことだから、それは庾信が「一壺の中、壺公は身を容るるの地あり」（小園賦）と賦したような小園だったろう。信は賀が「還自会稽歌」（一〇〇三）でうたう庾肩吾の子である。その二人に関わり深い梁の元帝が「楊柳は花樹にあらず、楼に依って自ら春を覚ゆ。……簷を払うはまさに意あるべし、偏えに桃李の人なるべし」（詠陽雲楼簷柳）というように、垂楊は桃李の人を得て憂いを忘れたであろう。易に「枯楊　稊を生ず、老夫その女妻を得たり」（大過）というのに似る。女妻とは、王夫之によれば若い処女の花嫁。春は闌け、垂楊の葉は老いる。それでも若い妻は子を生み、鶯は雛に餌をふくませる。

〇二〔残糸断えんと欲して　黄蜂　帰る〕　・欲斷　沈約「微根は断えんと欲するが如く、軽糸は更に聯るに似たり」（詠青苔）、蕭愨「二月鶯声纔かに断えんと欲し、三月春風已に復た流る」　・黄蜂　郭璞は「ここに翔びここに集い、蓬のごと転じ飄のごと廻る。紛紜として雪のごとく乱れ、混沌として雲のごとく頽る」（蜜蜂賦）といい、賀の作の後半を誘う。梁の簡文帝の「風を逐って従ら泛漾い、日に照らされて乍ち依微たり。君が留眄ざるを知り、花を銜みて空しく飛ぶ」（蜂）は、女性的だが恋愛感情を含み、耿湋の「去住餘霧に霑れ、高低過風に順う。終に慙ず蝴蝶と異なり、夢魂と通ぜざるを」（寒蜂

採菊蕊）は成らぬ恋だが蜂には男性的なイメジがある。この句はさきの易でいえば「枯楊、華を生ず、老婦その士夫を得たり」（大過）にあたろうか。初句の「垂楊葉老」が老夫とすれば「鶯哺児」は女妻。二句の「残糸欲断」は老婦、「黄蜂婦」は士夫となる。もっともここでは文字通りの「老婦」ととることはなく、夫は老い、子は手離れしたが、まだ若さを失っていない無為閑暇の女性にあて、その心のほころびに、黄蜂のような唐桟黒襟の苦み走った青年が舞い込んできた、と想像すればよい。

○三〔緑鬢の少年　金釵の客〕　・緑鬢　漆のように黒い鬢髪のことで、子夜が「時に感じて歓の為に嘆き、白髪緑鬢に生ず」（冬歌）呉均が「緑鬢愁中に改まり、紅顔啼裏に滅す」（閨怨）崔顥が「盧姫少年魏王の家、緑鬢紅脣桃李の花」（盧姫篇）とうたうように、若い女のを表現するのが普通だが、ここの「緑鬢少年」は王琦のいうように男子で「金釵客」は女性だ。「少年」を他の多くの本が「年少」とする。　・金釵客　釵は先が二股になったカンザシ。ただ、金釵客といえば、その金釵は二股のものにかぎらず、カンザシをつけたひとの意。梁の武帝「洛陽の女児名は莫愁、……頭上の金釵十二行」（河中之水歌）一般に女性のものとされる緑鬢を男性の形容とし、客という男性に多く使用される文字を金釵と結んで、少年よりは年長の女性を表現している点に注意すべきだ。

○四〔縹粉壺中　琥珀　沈む〕　・縹粉壺　呉正子は「縹は青白色。魏略に、大秦国は十種の瑠璃を出だす、縹はその一なり、と。ここに縹粉というは、あるいは瑠璃壺ならん」大秦国が史実としての何処をさすのかわからぬが、瑠璃壺は、青みを帯びた透明なガラスの壺と推察できなくはない。　・沉琥珀　沉は「沈」の俗字だが、底本は、人名のばあい「沈」を使い「しん」と読み、それ以外の主として「しずむ」という意味のとき「沉」をつかい「ちん」と読む。このほか、燕も、鳥のツバメのとき「鷰」、

宴などの意のときは「燕」と使い分ける。本書では、テキストとして示す場合これに従う。さて沉琥珀は、その壺に琥珀が沈んでいるので、詩の表層では琥珀は酒の色をさすが、深層では前の句の金釵の客であり、そうして表層の縹粉壺は、深層では緑鬢の少年なのだ。この消息は、壺にまつわる次の説話を知らないと、真意がほどけてこない。その一は、葛洪の作という神仙伝。壺公という売薬の老人がいた。役人の費長房が、壺公の常人でないことに気づき、毎日弁当を贈った。壺公は断らずに受け取り「暮れて人がいなくなったらまたおいで」長房が言われた通りゆくと「わしが壺の中に跳んで入るのを見たらまねをしろ」言われたようにするともう入っており、入るともはや壺ではなく仙宮世界で、壺公の左右には侍者数十人。壺公がいう「わしは仙人だ。以前天の役人をしていたが勤務を怠り人間界に流されたんだ（太平広記一二）その二は、康僧会の訳した旧雑譬喩経。母親の姪蕩を憎んで国を捨てた太子が、泉のほとりの大樹にのぼって休んでいると、仙人が一人でやってきて、水浴し、術を使って一つの壺を吐き出し、壺から女とキャンプを取り出し、キャンプの中で女と寝た。仙人が眠ると、女も壺を吐き出し、壺から年少の男を呼びだし、一緒に寝た。終わると女は少年を壺にしまい、壺を呑みこむ。と思うと仙人が目をさまし、壺の中に女をしまい。壺を呑み込むと、杖をついて去った（巻上一八）これとそっくりの話が呉均の作という続斉諧記にもみえる。その三は、郭憲の作と伝える別国洞冥記。巨霊という女がいて武帝に可愛がられた。帝の傍に青い珉壺があったが、巨霊はその中に入ったり出たり、帝の前で戯れたりした。東方朔が遠くから巨霊に目くばせした。巨霊はそれで飛び去った（巻四）以上の説話を背景において、賀の句にかえると、三句の緑鬢少年と四句の縹粉壺、金釵客と琥珀がきっちり対応しているのだから、金釵の客が巨霊のように壺の中に入り、グスタフ・クリムト（一八六二―一九一八）

の描いた「ダナエ」のように、うっとり沈んでいる。縹粉壺は緑鬢少年であり、金釵の客をひったり抱いている。この詩の舞台は小園で、しかし壺中の天というべき無憂の館。主は壺公のような謫仙だが、すでに垂楊さながら葉は老い、園内での権勢は漢の武帝に似てもそろそろ後継者を考えねばならず、さいわい鶯のような可憐な小婦を得、少婦は子を生んで雛のようにはぐくむ。子はしかし育てば遊糸のように飛散し、張った巣にかかった少年は仙才はあっても人情捨て切れず、費長房ほどの愚直さはなく、東方朔のように狡猾で、無為閑暇をかこつ少婦に目くばせし、壺的世界にさらに縹粉壺を幻出して、そこに少婦を誘い込む。この詩の前半は、そのようなことであろう。

○五〔花臺（かだい）暮れんと欲し　春は辞去し〕　・この句は第二句「残糸欲断黄蜂帰」と、「緑鬢」「縹粉」両句をはさんできっちり照応する。そのしるしに第二句の「欲断」と同じ場所に「欲暮」がはめこんである。やってきた（帰）ものが、事ののちに、立ち去る（辞去）のだとすると、「春」は「黄蜂」すなわち少年であり、「花台」は「残糸」で女だということになる。花台は、花見のうてな。

○六〔落花は起作（きさ）し　廻風（かいふう）　舞う〕　・この句には別国洞冥記の説話が伏せてある。武帝が愛した宮人で、名は麗娟、年十四、玉の膚がやわらかく、はく息は蘭より香しい。…芝生殿で廻風の曲を歌唱すると、庭中の花がみなちり落ちた（巻四）廻風の歌に庭中の花が飄落したように、辞去の声とともに縹粉壺中の女は振り落とされる。だが力を振りしぼり身を起こし春に追いすがろうとする。気まぐれなつむじ風はたわむれさえぎって女に舞いかかる。女は狂乱して空にただよい、やがてまた地に堕ちる。多くの注家はこの句を「落花は起って廻風舞を作す」と訓む。第五句までの構成から推察してわたしは「落花は起作し廻風は舞う」と読んだ。だが、この句には、両方に分岐しうるものが一句に収斂してあって、壺

中の天という二重の夢想の世界が、ここで同時にくだけ散る裂け目と成っている。

○七〔楡莢　相催して　数を知らず〕　・次の韓愈の詩三首がこの句の注釈となるだろう。「草樹は春の久しく帰らざるを知り、百般の紅紫芳菲を鬪わしむ。楊花と楡莢とは才思なく、惟だ天に漫り雪と作って飛ぶを解するのみ」（晩春）「誰か春色を収めて将に帰らんとする、慢緑妖紅半ばは存せず。楡莢のみ祇だ能く柳絮に随い、等閑に撩乱して空園を走る」（晩春）「已に身を将って地に著いて飛ぶを分とせば、那んぞ羞しくも践踏せられ光輝を損ぜんや。端無くもまた春風に誤られ、西家に吹落して帰るを得ず」（落花）そしてこれを賀の詩にあてれば次のようになろう。老いた夫の設けた壺中の小園で、その子を生み、育て、妻としての地に着いた生活に己の分を見いだし、甘んじていたら、それでもやはり老いは忍びより、死がやってくるにしても、穏やかに安らかな終末を迎ええただろうに、ふと逢った春風のような少年に魅せられ、みずからの意志と力で別の壺中の天を営もうとしたばかりに、この悲しい別れと、別れを拒もうとする狂おしい乱舞のうちに、行方も知らぬ飄蕩を味わねばならぬ。愚かしいといえばまことに愚かしいが、そうとみずから知りつつとどめようもなくさまよいでる女心は、ものの哀れともいうべきものであろう。そのような、慢緑、妖紅さまざまの春色をくるくる巻いて無造作にポケットに突っ込み、季節は立ち去るが、楡の莢ばかりはもののあわれも糞もなく、行列をみれば見境もなくそこに割り込もうと走り出す連中のように、天にはびこり撩乱として、夢消え幻消えた空園を、せきたてながら数しれず行く。

○八〔沈郎の青銭　城路を夾む〕　・沈郎青銭　郎は男子の美称。沈郎の青銭とは、晋の沈充が鋳造した青銅の銭で、庾信が「楡莢新たに開いて巧みに銭に似たり」（燕歌行）というように細長く楡の莢に似

ている。晋書によれば、晉は異民族に圧迫され、元帝のとき都を江南に移し、三国の呉で使っていた旧い雑多な銭を使うようになった。呉興の沈充が小銭を鋳て、これを沈郎銭といった。数が少ないので、やや貴重視された（食貨志）さて末の二句の意は、小銭の乏しいときに出たので値打ち以上に重宝されたが、都大路をせばめるほどにうずだかくてはどうか、沈どのの青銅銭にそっくりの楡の莢諸君……。これは、詩のヒロインのような女性を見つけると、まるで正人君子のくちつきで非難し触れ回る、ある種の週刊誌のようなジャーナリズムを、楡の莢に見立てているのだ。

（一〇〇三）

△会稽から帰って歌うとその序　　還自會稽歌并序

〔会稽より還りて歌う〕　・この歌には序文がついている。詳しいことはそこで説明する。拙稿「補悲」（李賀論考）参照。

〔并びに序〕　・詩や歌に序文がついているとき、そのことを示すために題に「并びに序」と記すことが多い。

（一〇〇三）

庾肩吾は、梁時代に、つねに「宮体」とよばれる詩や歌を作って、皇子たちと唱和したものだ。国土と時代が滅亡し

○○庾肩吾。於梁時。嘗作宮體謠引。以應和皇子。

ようとしたとき、肩吾はまず避難して会稽に潜伏した。その後やっと家に帰ることができた。ぼくの考えでは、その時きっとこれに関連する作品を遺しているはずなのだが、いま見ることができない。それで「会稽から帰って歌う」を作り、その悲しみになぞらえることにした。

及国世淪敗。肩吾先潜難會稽。後始還家。僕意其必有遺文。今無得焉。故作。還自會稽歌。以補其悲。

○「庾肩吾は梁時に於て、嘗に宮体の謡引を作り、以て皇子に応和せり」　・庾肩吾　梁書四九と南史五〇に伝がある。字は子慎（南史では慎之）新野（河南）の人。生卒年はわからぬが、四九〇年前後に生まれ、五五一年ごろ死んだと察せられる。八歳で詩をよくし、梁の武帝の第三子晋安王蕭綱に仕え、徐摛や劉孝義などとともに「高斎学士」とよばれ、文学の友として厚遇された。五三一年、昭明太子蕭統が死に、王が皇太子になると、肩吾は東宮通事舎人となり、太子率更令中庶子に遷り、太子が「文徳省」というサロンを開くと、ここで学士となった子の庾信や徐摛の子の徐陵らを指導する地位にあった。五四九年、太子が武帝の後を嗣いで帝位についた。簡文帝である。このとき肩吾は度支尚書となった。度支尚書は、大蔵大臣にあたる官職である。　・嘗作宮体　簡文帝が太子時代に好んで作った艶っぽい詩の文体を「宮体」すなわち、東宮御所の風、といった。南史に「帝の文は軽靡に傷み、時に宮体と号す」（簡文紀）という。　・謡引　歌曲。爾雅に「徒歌はこれを謡という」といい、徒歌とは楽器に合わせず肉声のみで歌うこと。引は琴に合わせる歌で「李憑箜篌引」（一〇〇一）の注で詳しく説明した。

・応和　求めに応じて唱和すること。肩吾の現存作品の半ばは太子時代の簡文帝に唱和したものであ

り、簡文帝の作品にも肩吾に唱和したことを明記するものがある。

〔国世淪敗するに及び、肩吾は先ず難を会稽に潜け、後、始めて家に還りぬ〕　・国世　国土と時代。曽益などが「国勢」とする。それなら、国の形勢。　・淪敗　沈下敗亡すること。南朝の梁は、武帝開国の五〇二年から北朝の魏と対峙し、魏が東西に分裂した五三四年以後も、梁と東西の魏との間に戦闘は繰り返されたが、東魏と協調して西魏と対立する傾きにあった。五四六年、東魏の実質的な支配者の高歓が死ぬと、その部下の侯景は河南に拠って叛き、西魏に帰属した。西魏での地位にも不安になり、河南の一三州をみやげに梁に帰伏を申し入れた。梁の群臣は、侯景が翻覆常ないこと、侯景を容れることによって東魏との和が破れることを理由に反対したが、武帝は侯景を受け入れた。五四七年、東魏は侯景を撃ち、五四八年正月、敗れた侯景は梁に逃れた。その二月、東魏から国交回復を申し込んでくると、武帝はこれを容れた。秋八月、侯景は反乱軍を起こし、一〇月、都の建康を囲み、死闘が続く。城中では、鼠を焼き、雀を捕え、軍馬を仆し、戦死者の肉を交えて食うに至った。侯景の軍とて同様だったが、五四九年二月、侯景は偽って和議を申し込み、城中の人の困苦を哀れむ皇太子の勧めによって武帝はこれを受け入れ、侯景を大丞相とした。和議は成立したが、侯景は囲みを解かず、三月、台城（宮城）を陥れた。以後、皇帝らは軟禁され、五月、武帝は餓死し、侯景の意によって、皇太子が即位した。肩吾が度支尚書となったのはこの傀儡政権での名ばかりの大臣で、なんの権能もあったわけではない。国世淪敗とは、そのような国土と時代をさした。　・先潜難会稽　侯景が台城を陥れたと聞くと、大江上流の梁の諸藩鎮はそれぞれの州によって、侯景討伐の軍を起こした。侯景は、簡文帝の詔といつわって、肩吾を江州（江西）につかわし尋陽王蕭大心の反抗を止めさせようとした。肩吾は逆に東南に逃れ、

会稽（浙江）で潜伏していた。侯景の腹心の将軍宋子仙が賞を懸けて求め、捕縛した。殺そうとしたが、肩吾の文名を知っていたので言った「お前は詩が巧みだということだ。おれの目の前でうまく作ってみせれば、命は許してやる」肩吾はたちどころに書き上げ、すぐれた出来ばえだったので、子仙は許して、肩吾を建昌（江西）の令に任じた。子仙もやがて天子になる野心をもち、そのとき利用しようと考えたのである。肩吾はそれから長い時間の後、江陵（湖北）にたどりついた。江陵は簡文帝の死後、その弟の湘東王蕭繹が帝位につき、都とした地。繹が梁の第三代元帝である。

〔僕、其のとき必ず遺文ありしならんと意うに、今焉を得る無し。故に「会稽より還りて歌える」を作り、以て其の悲しみに補えぬ〕　・遺文　現存の肩吾の作品に「乱後、夏禹の廟を経て」「乱後、行きて呉の郵（御）亭を経て」があり、会稽に潜伏した前後のものだから「遺文」といえないことはないが、家に帰ってからのものと思われる作品はない。　・補悲　詩経小雅の南陔、白華、華黍、由庚、崇丘、由儀の六篇は、題は遺っているが詩そのものは遺っていない。そこで晋の束皙が、その詩がのこっているとすればこのようなものであろうと想像して代りの詩を作り、「補亡詩」と名づけた。亡くなった詩を補う、なぞらえる、という意である。庾肩吾に、家に帰ってからの詩があったかどうかはわからないが、あったとすればこのようなものだろうと、李賀が想像して作り、肩吾の悲しみになぞらえた。それは束皙の補亡詩に学んだものだが、《補悲》は賀の詩法としては重要なもののひとつである。

（一〇〇三）

野べの埃に　香ばしかった壁も　黄ばみ　　○一　野粉椒壁黄

湿った蛍の光が　梁の御殿に　いっぱいだ　　○二　濕螢滿梁殿

宮城で　かつて皇子と唱和した　詩人
秋のしとねで　いま　銅の御車を　夢にみる
呉地の霜　ほつほつと　鬢におき
身は　池の蒲の穂さながらに　衰えた
胸せまり　殿門の金魚に別れを告げ
流浪の臣の　つたない誠を　守ろうとする

〇三　臺城應教人
〇四　秋衾夢銅輦
〇五　呉霜點歸鬢
〇六　身與塘蒲晩
〇七　脈脈辭金魚
〇八　羈臣守遠踐

〇一〔野粉（やふん）　椒壁（しょうへき）　黄ばみ〕　・椒壁　山椒を塗りこめた壁。漢代以来、皇后の宮殿の壁に山椒を塗りこめる風習があった。山椒は、その香気によって邪鬼を払い、暖気によって寒さを防ぎ、実が多いので多産を招くと信じられたからである。それで皇后の宮殿を「椒房」「椒殿」などといった。

〇二〔湿蛍（しゅうけい）　梁殿（りょうでん）に満てり〕　・濕螢　礼記に「腐草化して蛍となる」（月令）といい、蛍は湿ったところに棲み、その光も湿気を帯びる。宮殿の奥深く、壁に山椒を塗りこめ、冬のさなかにもなお汗ばむほどの暖かさをもって香わしかった皇后の部屋が、崩れてあらわに野の風をうけ、椒壁は土埃をかぶって黄ばんでいる。皇帝の起居して善美をつくした宮殿もすべて廃墟となり、簡文帝が「秋風乱蛍を駆る」（秋閨夜思）と歌ったように、蛍ばかりが冷たい光を曳きつつ飛びめぐる。簡文帝の「秋閨夜思」は、全体が「還自会稽歌」の本歌として取り込まれている。螢を「蛍」とする本があると、呉正子がいう。

〇三〔台城（だいじょう）に応教（おうきょう）せし人〕　・台城　六朝時代に天子の御所をこういった。　・應教　太子や諸王の命に応じて詩文を唱和すること。なお、天子の命に応じるのを応制、皇后や太子に応じるのを応令といった。

○四〔秋衾に銅輦を夢む〕　・銅輦　太子の車。陸機「剣を撫して銅輦に従う」（赴洛詩）かつて宮中で皇子と詩歌を唱和した身が、今はひえびえとした秋のしとねに、ひとり太子の銅の御車を夢みる。「宵牀画屏に悲しむ」（秋閨夜思）

○五〔呉霜　帰鬢に点じ〕　・呉霜　呉の地におく霜。梁の都の建康は、むかしの呉の地、会稽は越の地。霜は白髪の喩えだが、「初霜細葉に殞つ」（秋閨夜思）をふまえる。　・帰鬢　家に帰った人の鬢の毛。

○六〔身は塘蒲と晩う〕　・家に帰った肩吾は、むかしの肩吾ではなく、鬢に点々と霜をおき、その身は池のほとりに枯れふす蒲の穂のように衰えはてた。　・塘蒲　呉企明は、世説新語「顧悦は簡文と同年にして髪早く白し。簡文曰く、卿何を以てか先ず白き。対して曰く、蒲柳の姿、秋を望みて落ち、松柏の質、霜を経て弥いよ茂る」（言語）がこの塘蒲の典拠だという。

○七〔脉脉　金魚を辞し〕　・脈脈　情思が心のうちに強く波うっているさま。鈴木は、脈脈は「脈脈」の誤りで、脈脈は目を見はるさま、だという。要するに、簡文帝が「九重忽ち見ず、万恨心に満ちて生ず」（秋閨夜思）といったような状態なのであろう。　・金魚　魚形の門の錠。魚は夜に目を閉じないことから、夜を守るものとして宮門の扉に掛けられた。簡文帝が「夕門魚鑰に掩わる」（秋閨夜思）と歌った魚鑰がそれである。「金魚を辞す」とは、再び宮門に入って仕えぬ、ということ。

○八〔羈臣　逌賤を守る〕　・羈臣　羈を「羈」とする本があるが別体。羈は旅住まいのことで、羈臣とは主君のもとをはなれて流浪する臣。　・逌賤　逌は屯と同じで、行き悩んで進まぬこと。「逌賤を守る」とは、その困難な状態を捨て去ろうとはせぬことである。それはなぜか。「秋閨夜思」の女性が「妾の寐ねざるを知らんと欲せば、城外擣衣の声」といい、砧の声に、夫や恋人の帰らぬ孤閨の婦人の

悲しみを同情したように、肩吾もまた、なお帰還せぬ戦士や流浪の民の悲惨を思うからである。

・宋子仙に許されてから後の肩吾を、南史は「間道より江陵に奔る。江州の刺史を歴て、義陽の太守を領し、武康県侯に封ぜられ、卒して散騎常侍中書令を贈らる」というが、梁書は、宋子仙とのエピソードも記さず「逃れて建昌の界に入り、之を久しくしてまさに江陵に赴くことを得たり。未だ幾ばくもなくして卒す」というだけである。いずれも江陵に到着した時期が、簡文帝の生前か死後かも明らかでない。南史にいうのが事実なら「会稽から還って」後も肩吾の社会的地位は高く、賀の「遠賤を守る」には合わず、梁書にいうように「未だ幾ばくもなくして卒」したのなら、賀の歌にはふさわしいが「金魚を辞す」は梁書にしるさぬことである。肩吾の子の庾信の集に注を書いた清の倪璠は、肩吾が江陵に着いたのは五五一年ごろと見、ここでやはり逃れてきた信と出会うが、この年の終わりごろには死に、翌年の元帝の即位の時にはいなかっただろう、という。五五一年は、八月に侯景が簡文帝を廃し次いで帝とその一族を殺し、一一月には侯景が自ら帝と称し国を漢と号した年である。倪璠のいうのが史実に近いだろうと思うが、戦乱の中のことで確かなことはわからず、李賀がこの詩を作る前提として思い描いていた事件の経緯と合うかどうかもわからない。

・中国の史書は、個人の生涯をも描くが、個人の生涯の描写そのものが目標ではなく、社会や時代の大きな流れを把握するための一手段にすぎない。史書に重んじる事実は行為である。史書も心理を描きはするが、史書の取り上げる心理は、行為として表現されるか、明らかな結果を呼ぶべきものに限られる。人間を洞察するには、行為はもとより、行為として表現せられず、明らかな結果を呼ばない心理についても、子細な観察と判断を必要とするだろう。史家はその能力を持ちはしても、史書には社会の大勢を

示す以外のものは削り去らねばならない。ところで史家の捨て去る個人の行状や心理を保つ人がいる。それが文学者である。文学の場でとらえられる伝記には、史家のとらぬ行為はもとより、行為とならぬ心理、明らかな結果を呼ばぬ心理もまた取り上げられる。些々たる心理もまた、それ自体が人間を形成する要素であり、運命を動かす契機だからである。平凡な人間のはかない思いも、宇宙の運命と微妙に関りあっている。文学者の仕事は、そのような世界と人間との関わりを人間の側に即して描き出すことにある。行なわれなかった思いもまた、行なわれた行為と同じ重さで捉えられねばならない。

・賀のこの作での主題は、芸術における共感共鳴であろう。人が芸術作品に接してまず呼びさまされるのは、牽引か反発である。牽引は魅力、反発は抵抗と呼んでよいだろう。魅力や抵抗の大きい作品は、同じ作者の全作品を読破しなければならない衝動を覚えさせる。全作品を読むうちに読者の胸には作者の人間像が形成されている。この人間像は過去に死んだものではなく、生きたものとして、作者が生前に書き残さなかった別の世界についても、新たに語りかけてくる。その語りかけは、おぼろなもの、微かなもの、抽象的なものとしてではなく、明瞭なもの、確実なもの、具体的なものとして、例えばある一個の比喩として、象徴として、リズムとして、韻として、ことばの組み合わせとして、…つまり一個のまったく新しい作品として、われわれに迫る。それはかつてかれが作ったと言われながらすでに失われた作品の形であったり、かれがそんなものを作ったかどうかは分からないが、ある条件からは生まれなければならないと考えられる形をとることもある。この語りかけは、語りかけられた読者の手を借りて、明らかな作品となる。こうして生まれた作品は、もとの作者の作品ではなく、手を貸した読者の作品なのだが、手を貸した者は、これを自分のものと見るよりは、元の作者のもの、あるいは作者の心

情になぞらえたものとし、作者の心情を主調とする一編曲と考えることを好むであろう。賀の「補悲」は、まさにそのようなものであった。中国の詩には、唱和、雑擬、追和、和韻、用韻、次韻などの作が少なくない。唱和、雑擬、追和はプロットを補うもの、骨格をなぞらえるものであり、和韻、用韻、次韻は、同じ種類の韻字、あるいはまったく同じ字を押韻することによって、ひびき、におい、つやを補って肉付けするものであり、これらはいずれもその発生において「補悲」的なものといえよう。賀が悲しみを補おうとした庾肩吾は、梁朝後半を代表する文学者だが、皇子時代からの簡文帝とほとんど一体といってよいほどに巧みに唱和しえた人であった。「還自会稽歌」は、簡文帝の「秋閨夜思」と題する宮体の詩を本歌として、乱後の肩吾の悲しみを描き、唱和作者としてのかれの本領に脚光をあて、芸術における共感共鳴の意義を闡明した批評的作品、といえるであろう。

（一〇〇四）

## 長安城出発 ―権璩と楊敬之の両君に―

出城寄權璩楊敬之

〔城を出て　権璩・楊敬之に寄す〕　・出城　この城は、たぶん唐の西都の長安（陝西）のまちを指し、そこを出るというのは、足掛け三年に及ぶ官吏生活を止めて郷里の昌谷（河南）に帰ろうとするので、八一三年のことであろう。旅立ちには、知人や友人が町の外まで送って行き、そこで道祖神を祭り、酒宴をし、互いに詩を送るのが唐代知識人の習慣であった。その席を祖席といった。　・權璩　唐の李商隠が「ともに遊ぶところの者は王参元、楊敬之、権璩、崔植を密となす。……王、楊の輩、時にまた来

たって（詩稿を）探り取り、写して去りぬ」（李長吉小伝）というように、賀の親友の一人。新唐書一六五に伝がある。字は大圭、略陽（陝西）の人。宰相権徳輿の子で、八〇七年の進士。観察御史、中書舎人、閬州刺史。　・楊敬之　新唐書一六〇に伝。字は茂孝、弘農（河南）の人。権璩と同年の進士。右衛胄曹参軍、戸部郎中、連州刺史、太常少卿、大理卿、検校工部尚書。

（一〇〇四）

草あたたかに　雲くらく　万里は春だ　　〇一 草暖雲昏萬里春
宮城の花　顔に散り　旅人を送ってくれる　　〇二 宮花拂面送行人
漢代の宝剣みたいに飛んでみせると　ほざいた俺が　　〇三 自言漢劒當飛去
なんたること　病身を載せた車で帰郷などとは　　〇四 何事還車載病身

〇一〔草暖かく　雲昏く　万里春なり〕
〇二〔宮花　面を払いて　行人を送る〕　・宮花　宮城に咲く花。李白「宮花争って日に笑い、池草暗くして春に生ず」（宮中行楽詞）　・拂面　顔をはらう。李白「長袖面を払って君がために起つ」（白紵辞）　宮城の花の散りかかるのが、白紵辞の美女が袖をかえして舞うようだというのであろう。　・行人　旅人。賀自身を指す。
〇三〔自ら言う　漢剣　当に飛び去るべしと〕　・漢劒　芸文類聚に引く異苑によれば、晋の恵帝の時、武器庫が焼けたが、漢の高祖が白蛇を斬ったと伝える宝剣は、屋根を穿って飛び去り、行方が知れなかった、という。李賀は、任官して都にゆくとき、あの宝の剣のように飛翔してみせてやる、と豪語して

いたのであろう。李白「一朝飛去せん白雲上に」（白紵辞）

〇四〔何事ぞ　還車に病身を載せんとは〕　・還車　故郷に帰る車。

（一〇〇五）

示弟　　弟に

〔弟に示す〕　・弟　錦嚢集などが「弟」の下に「猶」字を加える。そのことに拠って、賀の弟の名を猶と推測する説がある。この詩は、郷里の昌谷に帰ってまもなく弟に示した作。昌谷は、今の河南省宜陽県三郷がその地に当たり、李賀の家があった。拙稿「一九四四年五月一六日の〈昌谷〉」（李賀研究一二）、森瀬寿三「李賀古里昌谷考」参照。

（一〇〇五）

弟に別れて三年後　　〇一 別弟三年後

家に帰って十日あまり　　〇二 還家十日餘

こよいの酒は《醁醽》　　〇三 醁醽今夕酒、

浅黄の帙には以前の書物　　〇四 緗帙去時書

病身だけが手もとにのこった　　〇五 病骨獨能在

人間世界になにが無かろう　　〇六 人間底事無

牛と呼ぼうが　馬と呼ぼうが　　〇七 何須問牛馬

○一〔弟に別れて三年の後〕　・前作「出城」参照。

○二〔家に還りて十日余り〕　・還家　朝鮮本が「寒家」とする。それなら、寒々とした家で。　・十日錦嚢集などは「一日」とする。鈴木のいうように、「事実上の問題」で決定しにくいが、後半の口調から察すれば、十日のほうがよいのではないか。

○三〔醁醽　今夕の酒〕　・醁醽　唐の太宗の功臣魏徴はまた酒作りの名人で、作った二種の酒の一つを醽醁といい、太宗は詩を与えて「醽醁は蘭生に勝る」（賜魏徴）と褒めた。蘭生は漢の武帝の飲んでいた酒である。醁醽は醽醁と同じ。ここでは美酒の代詞。

○四〔緗帙　去時の書〕　・緗帙　浅黄色の布で作った書籍の覆い。梁の昭明太子「文を飛ばせ翰を染むれば則ち巻いて緗帙に盈たす」（文選序）唐の太宗の「縹帙舒べて還た巻く」（帝京篇）は文字は違うが似た薄い藍色の帙。　・去時書　故郷を去る以前に読み馴れた本。読書家にとってこれほど懐かしいものはないだろう。

○五〔病骨　独り能く在り〕　・病骨　病身。　・独　ただそれだけが。錦嚢集などは「猶」とし、意味は同じ。

○六〔人間　底事か無からん〕　・人間　人間世界。淮南子の人間訓に次の話が載っている。国境地帯に爺さんがいた。その馬が胡族地帯に逃げた。人が見舞うと「よくならんとも限らんさ」数月のちにその馬が、胡の馬の群れをつれて帰ってきた。人が祝うと「悪くならんとも限らんさ」その一頭に乗ってい

た息子が落馬してびっこになった。人が見舞うと「よくならんとは限らんさ」一年たって戦争が起こり、若い男はみな出征して十人に九人は戦死した。爺さんの子はびっこなので召集されず助かった。　・底事　俗語で、何事と同じ。底事か無からんは、何が起こるか分かったものではない。

○七〔何ぞ須いん　牛馬を問うを〕　・牛馬　荘子の天道篇に、問答のなかで老子がいう「昨日きみがわたしを牛と呼んだとき、ほほう牛かと思い、わたしを馬と呼んだとき、ほほう馬かと思った。人が名をつけてくれたのに受け入れなければ禍をうけるだろう。人の言いなりにしておくのがわたしの常で、へつらってそうするのでもない」。何ぞ須いん牛馬を問うを、とは、ことさら牛か馬かと目くじら立てて人の言葉に拘わることはいらぬ、というのだ。せっかく役人になって都で就職したのに、退職だか休職だか知らぬが、二、三年で帰ってきて、青い顔でうろうろしている。といった噂が、本人に向かっては言われなくても、あちらこちらで囁かれ、それが弟の耳に入り、包んだつもりの話がさとられて、兄のこんな言葉になったのでもあろう。

○八〔抛擲して梟盧に任さん〕　・梟盧　梟も盧も、バクチの賽の目の名。屈原の「梟を成して牟せんとして、五白と呼ぶ」（招魂）は、よい目が出たのでさらに勝ち目を倍にしようと叫ぶ賭博場の興奮を描くが、ここのは賽を投げてもあとはどうなろうと出た目次第だ、という。自然に任せようとする荘子風の意気と、デカダンでわびしい投げやりな気分とが結びついた心境である。

※前号正誤　五頁一六行　丘象随（きゅうしょうずい）→丘象随（きゅうしょうずい）　二〇頁上段一七行　文語学　→　文学語学

二〇頁下段二〇行の野原氏の論文の発表時期は、一九八八年

# 阪神大震災

1995 01 21

原田　慶

一月十四日、土曜日。インフルエンザにかかつて高熱を出し、納骨をされる檀家があるというのにわたしは起き上がることができなかった。ようやく風邪が治ったばかりの主人が一人でばたばたしている。わたしが熱を出していることに気づかない娘を起こして手伝わせる。彼女もインフルエンザが治りきっていないのである。わたしはそれから二日ほどしてようやく熱が七度八分まで下がった。

十七日、火曜日。朝五時四十分頃、ギシギシと音がして本棚が揺れ、電燈が大きく振れている。大急ぎでガスの元栓を確かめに起き上がった。歩くのが不安定なほどの揺れである。本棚の扉が開いて本が滑り落ちた。火気は大丈夫。主人が縁側を走ってくる。娘も飛び出してくる。少し止んでは何度も余震があった。倒れるものもなかったのでほっとして、わたしはまた寝込んでしまった。

お粥を作ってもらってうとうとしていると、主人と娘がテレビを見ている。淡路島のほうが震源で神戸がひどいと言う。何年か前から、京都に大地震が起こると聞いていたから、この地震は京都がいちばんひどかったのだとばかり思っていた。神戸のほうでは火災も広がっているが、水がないのでなす術がないらしい。西宮には妹一家がいる。神戸の中央区には主人の知りあいの鈴木漠さん、東灘区には三浦国雄さんや、わたしの知りあいの後恵子さんがおられる。学生の頃の同級生もいるはずで、六月には神戸で同窓会が開かれることになっていた。起きてすぐにも駆けつけたいと思うが、高熱の後で体がいうことを聞かない。テレビでは被害の様子が一日中報道されている。亡くなった人

がどんどん増えている。西宮の土砂崩れのあったところではたくさんの人が亡くなった。警察と自衛隊の人々が必死の救助活動を続けている。

妹の家へ電話をかけるが繋がらない。滋賀県の母の安否を確かめる。母は大丈夫だが、西宮へも京都へも電話が繋がらないので心配していたという。十八日の夜になって大津の妹から電話があり、公衆電話からなら西宮へは電話が繋がるらしいと知らせてくる。十九日木曜日、千本通の公衆電話からかけてみると繋がった。妹の主人が出た。「やっとかかりましたわ、どうですか」「ああみんな大丈夫です。家もまだなんとか立ってます」「ガスも水道も」と言いかけたら切れた。ほんの二秒ほどである。もう一度ダイヤルを回す。妹が出た。「ガスも水道も出ないんやろ。寒いのにどうしているの」「電気だけ来てるから、暖房はそれで助かってる、水道は」それで切れた。仕方なく家に帰ってくると、しばらくして西宮の妹のほうから電話をくれた。それも繋がりにくかったらしい。食料や水は、妹の娘の勤め先の人が、たくさん持ってきてくださったので心配しないで、ということだった。わたしが風邪を引いていることは声で分かったのである。これだけでくたびれてまた寝てしまった。少しして起きて母の所へ電話する。妹たちが大丈夫だったので、母は安心して泣きそうになっている。テレビで阪急電車の神戸線が大阪から西宮北口まで折り返し運転を始めたと言っている。妹の家は北口駅から歩いて三十分くらいである。

二十日、金曜日。聴きに行く約束をしていた講演を、風邪を引いたからと、電話で断わり、謡いの稽古も欠席して、寝るつもりだった。そこへ大津の妹から電話で、これから西宮へ行くと言ってきた。それならわたしも道案内でもと、すぐ着替え、近くのスーパーへ買い物に行った。水、牛乳、お握り、パン、煮豆、煮魚、乾し果物、とにかくリュックにつめて出かけた。大津の妹と待ち合わせて阪急電車に乗り、十三で神戸線に乗り換えて西宮北口で降りる。駅は無事である。エスカレーターも動いている。駅ビルから見渡すと、すぐ近くの瓦葺きの家がみんな倒れている。鉄筋

のビルは立っている。階段を降りていつも歩く道へ踏み出すと、これはひどい。ほとんどの家が潰れて、粉々の木片の山になっている。立派な土塀に囲まれた家の塀がすっかり壊れ、中の築山や池のある庭園が見える。茶室風のあずまやも母屋もぺしゃんこに潰れている。こんな風流な作りの家だったのかと立ち止まって眺める。人の気配は全くない。歩き始める。家に押しつぶされている自動車。倒れた柱や板を取りのけて中からタンスの引き出しをだしている人がある。新しいたとう紙に包まれた着物が、どの引き出しにもきちんと入っている。結婚をひかえた娘さんでもあったのだろうか。こなごなの板きれの山の前に立って、幼い子どもの手を引いた若いひとが「みんなどこへ行ったんやろ」と子どもに話しかけるともなくつぶやいて呆然としている。ところどころ、水道管が破裂したのだろうか、道に水が流れ出している。わたしと妹は重いリュックを背負って、黙々と歩いた。妹は水、ガスボンベ、下着類、おにぎり、サンドイッチ、卵焼き、などを持ってきていた。

やっと目的の家に着く。ブロック塀はすっかり壊れてなくなっている。壁も剥がれたりヒビがはいったりして見る影もない。まだ新築して間がないから、かろうじて立っている。中に入ると階段はくさびで打ち付け、壊れたタンスを主人が直しているということで、カンカン音がしていた。台所へ入ると食器戸棚はほとんど空で、テレビが足もとでしゃべっている。食器はほとんど割れてしまったそうである。水が出ないので、紙のコップや皿を使っている。妹の話によると、地震の瞬間、用意していた朝食が、テーブルの上で跳ね上がったそうである。急いでテーブルの下に入ろうと端のほうに回った。その時、今まで立っていたところへ電子レンジが落ち、食器戸棚の扉が開いて、ざあっと食器がこぼれ落ちた。テレビがその上に転がり落ちる。テーブルの下に頭を入れたら米びつが倒れてきた。これをこぼしたら食べるものがないと思って、テーブルの下で米びつを抱いていたそうである。柱も跳ね上がったので、傍を這っていたテレビのコードが下へ潜り込んでしまっている。二人の娘は、それぞれの部屋に閉じ込められ、救い出

すのも大仕事だった。この三日間は考える時間もなく片づけるために働き通したという。ブロック塀が道を塞いでいたので、ハンマーを借りてきて、主人と二人でブロックを割って取り除き、道を開けた。その間に上の娘の勤め先の人が、日用品や食料をどっさり持ってきてくださったので、ありがたくて涙がこぼれたという。昨日、十九日に、わたしの主人が郵便局から送った見舞い金が、今朝すでに妹たちの手に届けられていた。世の中の仕組みと人の善意は信頼すべきである。今日は、娘二人が洗濯物をもって、コインランドリーを捜しに行ったということだった。

わたしたちに手伝えることはなかったし、長居してトイレに行きたくなったら水が出ないので、荷物を置いてすぐ帰ることにした。送って出た妹は涙を拭いている。近所でも家屋の下敷きになって亡くなった人が何人もあるという。次にきつい余震が来たら、家が倒れるだろうというので、妹たちは、台所のテーブルの下へいつでもは入れるように用意して、家族でかたまって眠っていると言った。わたしたちは慰めようもなくて「引っ越して来るなら、いつでも迎えに来るから心配しないで、元気を出して。また何度でも来るから」と背中を撫でて、帰ってきた。

町は見れば見るほど無惨である。囲りの瓦屋根の家がみんな倒れている中に、無傷で立っているように見える白いマンションが幽霊のような気がする。傾いた家の隙間から中が見えるところでは、外見以上に中はゴミの山である。まだ地震から四日目だから、ひとびとは手の着けようもなくどこかへ避難しているのだろう。かろうじて開けられた道を歩いているのは、わたしたちのように大きなリュックを背負って物資を運ぶ人と、時々、のろのろと自動車が走り抜けて行くだけである。駅までたどり着くと、すぐ電車が来た。神戸線で大阪まで出てから、京都行きの特急に乗り換えた。くたくたで眠りたかったが、妹が何か話していた。家に帰って大根を煮ていたら、今日、講演をされた森山茂先生の夫人恒子さんが、資料とちりめん山椒を持ってきてくださった。聴かせていただけなかったことをお詫したが、地震の話をするだけの元気が残っていなかった。夕食を済ませて七時ごろ、倒れるように眠ってしまった。